

道を求むる

——第三の人生観(二)——

金子大榮

今日の題目といたしましては、「道を求むる」といたしたいと思ひます。少し私事である、ということになるかも知れませんが、話してみたいと思ひます。老人になりますと、どうしても、未来よりは過去ばかり顧みることになりまして、したがって自叙伝というものを書いてみたいという要求もあるのである。私の生涯には、いろいろなことがありますから、自叙伝というものを一度書いてみたいと久しく思ひおつたのですが、あまり歳をとつてしまいますと、それも何やらつまらないことになりまして、今では書こうとも思ひません。しかし、道を求むるといふことに限つて、求道自叙伝といふものならば、書いてもみたいし、話してみたいと思ひます。

あまり正直なことを言うてもどうかと思ひますけれども、曾我量深先生という方がおられました、一昨年亡くなられたのでありますけれども、昨年はまだ、あそこへ行けば曾我先生に会えるんだというふうに思ふようなことがあります、どうしても亡くなられたような気がしませんでした。ところが、今年になりますと、そういうでも先生は亡くなられたんだと、こう思ひまして、にわかにも頼りなくなつたのであります。九十を越しましても、先輩がいるといふことは、何か力強いものであります。そういうことで、何を考えましても、これでもない、あれでもないといふようなことになりまして、はなはだ頼りないのです。やがて自分もこの世を去るといふことになれば、生涯何をしてき

たのであるか。こういうことになる、私は愚かなりにも、道を求めてきたのである、ということだけは言えるであろう。本年は、「第三の人生観」という題を掲げましたが、これは言うまでもなく第一の人生観、第二の人生観というものがあって、そして、その第三の人生観ということが出てきたのであります。要するに、私の生涯を貫いているものは、人生観を求めてきたのであるということでありませう。

それで、今日の話をどこから話そうかと、悩んでいたのですが、今朝、家を出る時に一つ気がついたことがあります。それは、道を求むるということをもつて生涯を定めたということを教えるものは、『華嚴経』にある善財童子の物語であるということです。今日はその善財童子の物語というものを話して、そして諸君に考えてもらおうと思います。親鸞聖人のお手紙を集めてある『末灯鈔』の第一通の終わりの方に、

釈迦如来の、御善知識者、一百一十人なり。『華嚴経』にみえたり。

という言葉があります。これがどうもわからないのです。ここには「釈迦如来の、御善知識者」と、こう言うてありますけれども、『華嚴経』では善財童子の善知識であります。そして、その善財童子の善知識を数えますと、五十三人の善知識なのですが、それが「二百一十人なり」と、こう言うてあります。

この『末灯鈔』の文章につきましては、いろいろと考えられるのですが、まず一つ注意されるのは、「善財童子」という名前です。つまり、道を求むる者は「童子」である。幼い子供心、それが道を求むるものであるということが一つ、まず私には考えさせられるのであります。

私の生涯は、童子であったのか、それとも老人であったのか。私が若い時分に、『精神界』という雑誌がありました。それに投書をした時に、読者が私の文章を見て、「これはどこの人であるか」、「これは北国の生まれの人だ」、「ああ、北国に生まれたお寺の老僧ですか」と、こう言われたことがあります。老僧扱いされたのであります。いかにも私が若い時に書いたものは、老僧らしいものであったらしいのです。ところが、もう晩年であります、広島へ

行きまして、ある人が私を尋ねて来て、そうして京都へ帰られた。京都でその人が「金子という人はどんな人ですか」と尋ねられたのです。そうしましたら、「そうですね、赤ちゃんみたいな人です」と、こう答えられたそうです。普通は、赤ん坊から老人へと行くんですが、私は老人から赤ん坊へと行くことになったらしいのであります。それが自分でもよく分からない。なるほどそう言われれば、私はいつでも赤ん坊であります。

そしてまた、賢い者であるか、愚かな者であるかということになると、さあ、どちらなのでしょう。頭のいい男だといって誉められたこともあります。それもよほど賢いということらしいのです。しかし、金子はあまり頭はよくないと言われたこともあります。賢者か、愚者か、そこもわからないのです。そういうことになりますと、ずいぶんいろいろな書物を読みました。ある意味においては、何でも読みました。その点から言えば、何でも知っていると、いうことも言えるのですけれども、しかし、それが私の身についたかということになると、どれ一つ、これ、というのがありません。ですから、確かに愚者であるに違いない。もうやがて十年にもなりますか、もう二人ともなくなりましたが、私の同級生の友達がおりまして、あるところでお会った時、一人はこういうことを言う。「金子という人間ほど勉強嫌いな人間を知らない。あんな不勉強な人間が、どうして大学の教授にまでなったのか」、そう言って不思議そうに話しておりました。もう一人は「そうかなあ、僕に言わせると、この男は朝から晩まで勉強しかなかったんだと思う」、こう言いました。私という人間は、自分だけでない、はたから見ても得体の知れないものなのであります。そういうような意味におきまして、何でも知っておるし、そして何にも知らない。何でも知っているという点においては、非常に学者冥利であります。けれども、何にも知らない。

けれども、ただ一つ、私は真宗というものが知りたい、だから、一切の学問は、私にとって、みな真宗学である。原始仏教も真宗学である。大乘仏教も真宗学である。物理学も真宗学である。数学も真宗学である。自然科学も真宗学である。こういうふうなことになってくるのであります。数学は数学として独自のものであるに違いないし、動物

学は動物学として独自のものであるに違いないが、その学の面目というものは、私にはよくわからない。ただ動物の本を読んでも、数学の本を読んでも、それが私にとっては人生観を求めるといふことなのである。つまりそこに人生観を欲している。そうであるから真宗学である。こういうふうなことになるのであります。

ですから、人に向かって話をする時には、私は何でも話します。数学の話でも、哲学の話でも、自然科学の話でも、何でも話をしますが、それを本当に知っているかということになると、はなはだおぼつかないところであります。そういう自分におぼつかないことは人々の前で話すものではないということをおぼつかないことを、小さい時より父親から言われております。孔子や孟子、『論語』の話を儒者の前で語るものではない。語る方は、よほどわかつたつもりでも、聞く方にしてみれば、それが知つたかぶりに聞こえて嫌なものである。だから専門家の前で専門の話をすべからずと、こういうことを父から固く教えられたことがあります。それはやはりそうでしょう。科学者の前で科学の話をすれば、聞く方が嫌であるに違いない。それはよくわかります。けれども私はそうでない。そういう人の前で、そういう話をしてみて、いかがでしょうかと聞いてみたいのです。私が説教するのでなく、あなたが学んでいらつしやる学問から考えて、私の言うようなことが何かご参考になりませんか、私の言うことが、あなたたちの学問に背くか背かないか聞いてみたい、こういうことです。話すことは聞くことであるという意味においては、むしろ専門家の前で専門的な話をしてみたいというふうな要求が、私にはあるのです。そんなふうには、私は人生観を欲している人間であるといふことを、晩年になつた今日、若い人たちに聞いておつてもらおうといふことで、善財童子のことを思い出したのです。

『末灯鈔』には、「釈迦如来の、御善知識者」とありますが、釈迦如来にも善知識があつたのだろうか。それは考えられないことはありません。お生まれになつてから覺りを開かれるまでの間に、いろいろな人に出会われた。そのいろいろな人は、みんなお釈迦様の善知識であるに違いない。門番も善知識であつたであろう。最初に会われた外道

も善知識であったのであろう。こういうふうには、釈迦一代記を、釈尊の求道物語と見ることも、できないことはない。けれども、そう考えても、この宗祖のお手紙の言葉は、何かもう一つしっくりこない。昔の講録を読んでみますと、「お釈迦様のお説きになった善知識は」と、こういうふうには解釈してあります。なるほど、それならわかります。けれども、そうだとしましても、お釈迦様がお説きになった善知識ということ、宗祖はどうして「釈迦如来の、御善知識者」と言われたのであろうか。

そこはまだ、私もわかっておりませんが、とにかく、『華嚴経』にみえたり」と言われているその『華嚴経』では、道を求むる者、求道者は、善財童子であります。その善財童子の善知識ということ、「釈迦如来の、御善知識者」と言うておられるのですから、つまり、それは釈迦の精神に適うた意味での善知識といつてよいのでありましょうか。あるいは、お釈迦様は覺りを開いて道をお説きになったに違いないけれども、その求道の一面ということにおいて、釈尊を求道者として見る時になると、それは善財童子である。だから、善財童子であるということが、すなわち求道者としての釈尊である。こう言つてよいのであろうか。

いろいろ考えることはできますが、ともかくも、求道者は善財童子である。求道者は童子でなくてはならない。先ほども申しましたように、赤ん坊であるということが、求道者の姿である。「善財」と言うのですから、善い宝を持っている、みんな財産であるということでもあります。童子にすれば、聞くもの、見るもの、みなその人の財産となるのである。つまり数学の本を読もうが、天文学の本を読もうが、それは自分の道を探むるという心においてはみな財産になるものである。善き財産。ですから、善財童子というのは、求道精神というものを表しているに違いないのであります。

ところがその善知識が「一百一十人なり」と言われている。この数え方が、ちょっと分からないのです。『華嚴経』を読んでみますと、確かに五十三人の善知識と申すてあります。それが「二百一十人」になっているのですから、数

が合わない。そのように「一百一十人」になると数えることについては、こういうことであります。五十三人の善知識でありますけれども、その最後に、文殊と普賢というものが出てくる。五十三人の善知識がどうして善知識になつたかという、文殊と普賢というものがあからであります。つまり文殊と普賢とが善知識を貫いておるものであります。したがって、善知識も、文殊の智慧をもって普賢の行を行ずるものであり、善財もまた、文殊の智慧と普賢の行を持つておるものであります。この文殊と普賢というものが、大乘仏教では非常に大事なものであります。

文殊は虚心です。善財も童子でありますけれども、文殊も童子である。文殊も童子であるということは、どこにあるかという、言えば虚心ということでしょう。心を虚しくして物にこだわらない。虚心がすなわち文殊であるに違いない。虚心坦懐であるのが、それが文殊である。それからしますと、普賢の方は、老境とも言いたいのであります。普賢の二字を見ると、普く賢しですから、何もかも知っている。つまり善意に解釈することを知っている。世の中の全てのことを善意に受け取るということは、知っているということである。普賢行というものは、そういうことであります。胸に一物がない。なんでも善意に解釈する。全てを仏と拝んでいくことのできるものが普賢である。文殊の智慧、普賢の行、この二つが大乘仏教を貫くものであるということ忘れてはならないのであります。

「普賢」という言葉の梵語を英訳したものをもう一度、日本語になおしたものをみると、四方八方めでたしめでたしと訳されております。これはおもしろい訳語です。普賢は「遍吉」と申しますから、遍く吉祥である、と。吉はめでたいということでありますから、どちらを向いてもめでたい。だからして、虚心坦懐にして善知識を発見するものが文殊であり、その発見者に対して、そこに善知識が現れる。それが普賢ということでありましょうか。その文殊・普賢に導かれて、そして普賢の徳を成就していく。そこに善財というものがあるのであります。

これはいずれ話さなければなりません、真宗で申しますと、念仏は文殊の心になっております。「行巻」を読みますと、南無阿弥陀仏ということが、すなわち文殊の智慧である、こう指摘してあります。そうしますと、普賢

の行とはいったい何であるのか。これは、還相回向のところへいくと普賢行というのが出てくるのであります。文殊の智慧があれば、その智慧によって、還相・利他の徳というものを成就することになるのでしょうか。

そうしますと、五十三人の善知識と言いますが、その五十三人の上に文殊と普賢とを特別において、そして五十五の善知識と言っても差し支えないのであります。ところが、ここで考えてみなければならぬことがある。その善知識というものは、いったいどういうものであるかということです。

善知識というものの特徴が、どういうところにあるかというところ、一つには、その人が必ずしも仏法というものを語っていないということです。よろずの道において賢きもの、それが五十三の善知識であります。その中には、船頭も出てきますし、文法学者も出てくる。あるいは、香道の先生、詩が好きな人も出てくる。つまり、善知識というものは、一切の人と考えてもいいのなにかと思います。善財童子の前には、全ての人が善知識になる。というよりは、全てのことが善知識となる。

そうしますと、私が先ほど申しましたように、天文学でも数学でも哲学でも文学でも、みんな我々に人生というものを教えるというのならば、あらゆる法を説くもの、その法が全て善知識の法である。『華嚴経』では、あらゆる人の行なうところが善知識になっておるのですが、これを私流に翻訳しますと、どんな学問でも、要するにそれは自分がどうあるべきかということを教える、という意味において善知識である。こういうことが言えるのであります。

それともう一つ注意されることは、五十三人の善知識は、決まったように、「私の知っておるところはこれだけです。もつと聞きたければ、どこそこへおいでなさい」と、こういうふうに言うことです。華嚴の学者は、これを「自分・勝進分」と呼んでいます。「自分」というのは、自分の分限において語るもの。それから「勝進分」というのは、もつと知りたければ、この人をお尋ねになつたらいいでしょうと、その次を紹介する。これが善知識というものであるまいかと思えます。善知識というものは、そういうものであって、私の言うことだけで十分だ、ということ言う

のは、善知識と言えないのではないかと思います。

余談になりますけれども、法然上人もまだ本当でなかった、『歎異抄』も、蓮如上人の『御文』も、まだ本当のことがわかっていないのであり、要するに『教行信証』一つに聞かなければならないということを言うている人が近頃おられます。私自身もそういうことを思うてみたことがあるものですから、そう考えるのも無理はないと思います。しかし、本当に道を求むるならば、法然上人は法然上人でよし、蓮如上人は蓮如上人でよし、また、『歎異抄』は『歎異抄』でよし、ということではないだろうか。どのお方も、私の言うことだけを聞けとおっしゃらないのだから、その人によつて、また次の善知識を教えられるということもありうるのではないだろうか。善財童子の求道というものを考える時、そういうことが思われるのです。それは真宗だけのことではなく、仏教諸宗という意味におきましてもそうです。道元を読めば道元に教えられるところがある。日蓮を読めば日蓮に教えられるところがある。それらの人々は、ひよつとすると、私の言うことだけでいいと、こうおっしゃるかもしれませんが、道を求むる者の前には、次から次へと教えられて、それならばこれを読んでみよう、それならこれを読んでみようというようなことになつていくのではないかと思います。つまり、一人の善知識といひましても、その一人が二役をしている。その一人二役をしているという点に、善知識の面目があると思うのであります。それが一番大事なことでないかと思ひます。その一人二役という善知識の教えによつて、求道者の方が実践する。私の先ほどのことと言ひますと、数学の書物を読むとなかなか面白い。それを読むと、哲学の書物が読みたくなる。そして哲学の書物を読むと面白いから、また文学の書物を読みたくなる。こういうふうには、一つの学問には必ず二面があつて、次へ次へと我々を導いてくれる。こういうことであるとすれば、『華嚴經』に示される善知識が、文殊と普賢を加えて五十五人であつても、どの善知識も次から次へと指し示すものがあるのであるから、「一百一十人」ということになると思ひます。できないのではないかと思ひます。

そのようにして、善知識を考えてまいります時、もう一つ注意されることがあります。五十三の善知識のその最後に弥勒というものが出てくる。その弥勒は、ただ菩提心だけをずいぶん長々と説くのであります。善知識の最後に出てくる菩提心というものは、これは善財童子が道を求めていくことにおいて、実は最初にあつたものに違いない。私が考えていこうとする「第三の人生観」ということは、そこに着眼があるのであります。

第一の人生観と申しますのは、道は自然にあるということとす。これは、東洋の道徳は、それであるということとありまして、「天の命これを性とす。性にしたがう、これを道とす」と、そういうことでありまして、ある意味において、私などの生涯を貫いているものであると言つてもよいかわかりません。あるいは、明治時代の教育を受けた者にとっては、それが当たり前のことのように思われているかもしれませんが。今でも、少し耳を傾けてごらんになれば、おわかりになるのであります。各宗の大家のお話を聞いてみると、そもそも宇宙の根本原理とは、ということとを言われる。それを聞いておりました、ああ、また宇宙の根本原理が始まったと、こう時々思うことがあるのですが、しかし人間のものの考え方には、何か宇宙の根本原理から決めてかからなければならぬということがある。ということは、要するに、大自然というものと、その大なる自然の内に置かれた自分との間において、道というものが成り立つと考えるということとす。その場合、そこに明らかにする人生観とは、自然を背景として、そこに出ているところの人生とはどんなものであるかということとを明らかにすることである。こういうことが言えるのでしよう。それを私は第一の人生観と言つてあります。

その自然と言いましても、要するに、我々にとつての自然というものは、目に見える山とか川とか草木国土というものではない。そうすれば、道は自然にあるということが、動かすことのできないものでないか、ということがある。私にとりましては、小さい時からの育てということもありまして、明治時代の教養ということもありまして、これが第一の人生観というものになつていたのであります。

ところが、それが崩れたと言いましようか、あるいは反省をしてみなければならぬということ、その第一の人生観に破綻がやってくる。そこで考え直してみなければならぬということ、第二の人生観であります。この第二の人生観というものは、あるいは東洋の思想に対して、西洋の思想であると言えるかもしれないのであります。それは、人間であるということ、つまり、まず「今ここにあるもの」から道というものは考えていかなければならないのではないかとことです。西洋の思想のことはよくわからないけれども、例えばソクラテスが「汝自身を知れ」と言うたこと、そしてデカルトが「我思う、ゆえに我あり」と、こう言ったことも、まず、人間の在り方、道というのは、人間の在り方の上に求められなければならないということでありましよう。それが西洋の思想であり、あるいは現代の思想であると言ってもいいのであろうか。社会が問題である、人間世界が問題である。山がどうだ、川がどうだというような、そんなことはどうでもいいのではないかと、道というものを考えていこうというのが、それが西洋の思想の主流ではないであらうか。そして現代人は、それより他に考えないということでないであらうか。

タゴールを読んだ時に、東洋の哲学は、森林から出ている。西洋の思想は都会の屋根の下から出ている。こういうようなことを言うてあつたのを思い出しますが、確かにそういうふうなことでしよう。山がどうだ川がどうだ、地誌地勢がどうだと、こう言うても、それは何か田舎じみている。都会のアパートに住んでいる人間にとっては、それよりは、こうして生きていかなければならない、どうやって生きていくかというふうな、人間が問題なのではないだろうか。社会学というものも、そういうところから出てきたのでしょうか。結局、「今、ここにあるもの」から考えていくということでもあります。それを私は第二の人生観と呼ぼうとするのであります。

しかし、そこで考えてみなければならぬことは、第一の人生観にしても、第二の人生観にしても、それによって道というものは成り立つのだと言いますけれども、実は、それをはっきりさせたものは、求道心そのものにあつたの

ではないであろうかということがあります。求道心というものがあって初めて、道は自然にあるということも言い出したのであり、求道心あって初めて、人間はどうしなければならぬかということも出てきたに違いない。そうすれば、第一の人生観も、第二の人生観も、何か背景があるようだけれども、そういう第一、第二の人生観というものの背景として見出されるものは、実は道心そのものでなくてはならない。

だから、善財童子の求道の物語を読んでもみましても、弥勒によって菩提心が確かめられるということは、一番最後に出てきている。菩提心が一番最後に出てきているけれども、善財童子が最初の善知識に出会った時から、いったい何を考えていたのかというと、それは道を求めていたということがある。その最初から最後までを貫く求道心こそ、本当の人生観の根本となるものではないであろうか。それが仏教であったのである。だから、仏教の人生観は、第一の人生観でも、第二の人生観でもなくて、まさに第三の人生観と呼ぶべきものである。そして、第三の人生観があって、第一の人生観も、第二の人生観も意味を持ち、それぞれの場所を与えられる。第三の人生観があるから、第一の人生観も、第二の人生観もいらぬというものではなく、第三の人生観というものがあって、それによって第一の人生観も、第二の人生観も成り立つのではないだろうか。こういうことが、今回の講義の主意なのであります。

それで、「はじめ」という言葉を表す字には、二つありますね。一つは「始」という「はじめ」、もう一つは「初」という「はじめ」です。この二つの関係は、「始」をはじめとして「初」はじまると、こう言うことができますよ。「始」と「初」とは、いささか感じの異なつたものであります。「始」は、時間的な「はじめ」であります。それが手始めでした、と言う時の「はじめ」は「始」です。それから言えば、私にとりましては、そしてまた人間は全て、第一の人生観から始まつた。第一の人生観は、「始」であつたのである。しかし、その「はじめ」を成したものに、「初」、初心というものがある。初心というものは、始めも中も終わりも貫くものが初心である。だから初心こそ本当に今ここにあるものでなくてはならない。その「初」というものを、我々が忘れると、我々の日々にあるもの

は、古くなってしまふ。「初」は常に新たなるものでなくてはならない、一生を貫くものでなくてはならない。

「はじめに何々ありき」という言葉があります。こういう時のその「はじめ」は、「始」でなくて「初」であるに違いない。私の人生観の「はじめ」は何であったのかということを含めて、それは自然と人間ということであったと言う時の、「はじめ」は、確かに「始」であったに違いない。そしてその「始め」の人生観、そのことにも「初」があつたに違いないのです。けれども、「初」が「初」として、はつきりしてきたのは、かえつて、第一の人生観、そして第二の人生観というものを経て来て、そしてその「初」という「はじめ」に帰つたのであります。人間が帰ることのできる「初」は、それは世阿弥が言う「初心忘るるべからず」ということでありまして、その時々の「初心忘るるべからず」ということであります。老後には老後の「初心忘るるべからず」ということで、年寄りになつても初心でなくてはならない。その初心を貫くという所に、それによつて第一の人生観も、第二の人生観も成り立つたのでないであらうか。

「第三の人生観」ということで、そういうことを言いたいのですが、さあ、それがどこまでうまく話せるか。これは話してみなければわからないのですが、実は『親鸞教学』にも「第三の人生観」という文章を書いたのですけれども、どうもうまく書けないのですね。何度書いても気に入らないのですけれども、気に入らなからといってやめるわけにはいかない。そういうことで、本年の講義は、そこに一つの願いを込めているのですが、何とか十回の話において、菩提心、すなわち道を求むる心というのが、あくまでも人生観の根本であつて、それがなければならぬという話を話してみたいのであります。

もう一つ言うておきたいことがある。それは、先ほども申しましたように、道は自然にあるということが私たちの幼少の時分から教えられた思想であり、そして今でも、そういうことが生涯を貫いているに違いないと言つていいのでしょうか。その思想が浄土というものを考える上で、どういうことになつていくのか、ということでもあります。浄土

というものは、畢竟、大自然でないであろうか。私は、浄土は大自然の世界であるということについては、あまり疑いを持たないのですけれども、しかし、そうはいかない事実がいくらでも出てくる。したがって、真宗を語る人で、自然は浄土であると、こう言うことを嫌う人もあります。私はそれを嫌う人の気持ちもわかりますが、しかしやはり「自然の浄土」、自然即ち浄土であるという言葉がありますから、それをどう考えていけばよいか。浄土は、やはり理想的な自然、吹く風、流るる水、そういうものの清らかさが説かれていますから、要するに浄土というものの見本は自然にあるに違いない。そういうことで、「自然の浄土」ということ、浄土は自然の世界であるということ、どこかで明らかにしたいと、こう思っているのです。

それで、『親鸞教学』の原稿を書いてみて、そこで一つ気がつきましたことは、和讃の中に、

念仏成仏これ真宗

万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして

自然の浄土はえぞしらず

という和讃があります。「自然の浄土」、こう言うけれども、それは念仏しないでわかるものではない。本願を信じないでわかるものではない。こういうことになりますと、道心、道を求める心がなくては、「自然の浄土」はわかるものではないということになる。だから道心を抜きにしては、浄土は自然であるとか、自然界が人間の生活の帰依する所であるとか、そんなことを言うたって、それは「自然の浄土」をわかっているということにはならないということとあります。要するにそれはその人の夢想の世界、その人の想像の世界であって、真の「自然の浄土」ではない。真の「自然の浄土」は、「念仏成仏これ真宗」ということにおいて、権実真仮を分けていくところに明らかにする。

それはまた、

信は願より生ずれば

念仏成仏自然なり

自然はすなはち報土なり

証大涅槃うたがいなし

五濁悪世のわれらこそ

金剛の信心ばかりにて

ながく生死をすてはてて

自然の浄土にいたるなれ

と云うてあるように、本願を信じなくしてわかるものではない。

自然こそ浄土であるということ、浄土が真に自然である、限り無く自然であるということは、我々が本願、念仏、そしてまた道心というものを抜きにして想像しているような自然は、真の自然でなく、したがって浄土ではないということとです。そこに何か、ただ一首の和讃ですけれども、私にとっては「権実真仮をわかずして 自然の浄土をえぞしらず」というその「えぞしらず」という言葉に、何かこたえるものがあるのです。利いたふうなことを言うても、「念仏成仏これ真宗」ということが分からないで、もう一つ言えば、浄土の菩提心というものがなくして、どうして自然が浄土であるということがわかるのか。第一の人生観というものも、第二人生観というものも、第三の人生観を経なくては、本当は成り立たないものであるということを考えながら、そういうことも考えてみたいと思うのであります。今日はここまでにおきます。

(本稿は、一九七三年五月七日の大谷大学における集中講義「第三の人生観」の筆録である。文責編集部)